

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

オリンピックの熱がさめやらぬ間に各地で異常気象によるゲリラ豪雨にさいなまれ、ここ数年気候も世の中も不安定なまま推移しています。猛暑からようやく秋の兆しが漂ってきたかと思うと、尖閣諸島や竹島問題でヒートアップしています。

昨年は、東日本大震災と津波、そして原子力発電所事故による放射線被害という我が国にとってこれまでにない大きな災害におそわれました。多くの尊い命が失われ、いまだに復興も十分でなく苦しんでおられる多くの方々がおられることに国民の一人として本当に心の痛みを感じる年でありました。しかしながら混沌とした状況の中で、暴動や略奪や秩序の乱れなど、海外では当たり前のようなことが我が国では一切なかったことは、全世界からも賞賛され日本人の心、その高い道徳心と霊性が世界に示されたことは、日本人として誇りに思えることでありました。我が国はこれまで平和外交を貫いてきて、争うことを避けてきました。賛否両論あるものの、少なくとも学問と政治は切り離して考えたいものであります。私たちの目標は医療を通じての社会貢献であり、これは世界の共通であると考えます。21世紀は心の時代であり我が国は世界の手本となるべき国であると考えます。

本誌では、11編の論文が掲載されました。多くの原稿が寄せられ、厳しい査読の中から選択された論文です。多くの消化器外科医が実臨床を通じて学んだことを広く知識として共有する積み重ねが現代の医療の根幹にあることをもう一度思い起こし、若い消化器外科医がこぞって投稿してくれるレベルの高い雑誌になればと祈念しています。

がん医療を振り返ってみると、今年度はがん対策推進基本計画の改定がなされました。今回は、重点的課題として薬物療法、放射線療法に加え、「手術療法の更なる充実」が加えられました。がん治療においては固形がんの約90%以上は治療の第一選択が外科治療であり、外科の役割は大変重要であることが再認識されたわけです。抗がん剤治療が効くようになったからこそますます切除できる症例が増している現状から、チーム医療の推進が必要不可欠であります。国際社会においても医療においても、お互いを理解し認め合うことから始まり、役割分担のもと、力を合わせることは重要であると感じるこの頃です。

本誌は消化器外科医の論文発表にはうってつけの雑誌であり、ますますの論文投稿をお待ちしています。

(吉田 和弘)  
2012年10月1日